

高雄市立歴史博物館との友好協定を機に

いいた人形劇センター 理事長 高松和子

飯田市と人形劇についての話に入る前に、少しだけ私と私の周りにいる台湾びいきの方々のことを書かせていただきます。私は、夫が長野県飯田南ロータリークラブの会員であり、このクラブは、台湾桃園の姉妹クラブであったということもあり、クラブ交流のために数回の訪問、また、職場の旅行でもと合わせて5回台湾を訪問しております。案内の人に「もう見るところはないぞ」と言われ、皆で笑ったことがありました。何回目だったか、台湾が世界に誇る故宮博物院を鑑賞し、外へ出た時に、何人かの方が後ろから「高松さん」と呼んでくれたことがありました。ふと振り返ると、私の家の近くの中学生たちと教員たちでした。彼らは飯田に伝承する三人遣いの人形浄瑠璃を演じるために、台湾を訪問していたのです。飯田とともに人形劇活動を行なっている仲間とここが異国であることさえ忘れてしまうほどに自然な出会いであり、なぜかとても心地よかった瞬間でした。

夫の所属するクラブがなぜ桃園と結び合っているかということ、台湾と仕事上の取引をしている方々がとても多いからでしょう。半生菓子を製造販売している私の知人は、毎月のように台湾を訪れており観光や食のことは勿論、台湾の歴史や台湾の方々の気質などもよく知っているようです。人形劇で言えば、小学生を招待したり、人形劇団を招聘したりと市民レベルで飯田と台湾を結ぶことに尽力された故酒井隆夫氏の働きはとても意味深いものがありました。彼がいたから、布袋戲に出会い、その面白さを知ることができたと言っても過言ではないでしょう。まずは、台湾と飯田が距離的にも人々の気持ちもとても近い関係にあることをお伝えして本論に入りたいと思います。

飯田と人形劇 —はるかなる時空を超えて繋がってきた人形芝居—

飯田市は、日本のほぼ真ん中にあります。諏訪湖から南流し、太平洋にそそぐ、天竜川の中ほど、東西にアルプスがそびえる豊かな自然と優れた景観、四季の変化に富んだ南信州の中心都市、人口約10万人のまちです。昔は、南北の交通の要衝として、また養蚕や木材などで栄え、人々の暮らしは豊かであったと言われていました。そして飯田市とその周辺地域伊那谷は、獅子舞、農村歌舞伎、湯立神楽、人形浄瑠璃などの民俗芸能が今なお地域の人々によって、脈々とその歴史を織り続けてきているのです。300年余に亘って繋がってきた、三人遣いの人形浄瑠璃は、毎年春秋には、舞いや人情噺などを上演し、地域の人々に喜びと安寧を与えてくれています。

1979年、そうした土壤に着目した飯田市と全国の人形劇関係者たちの気持ちが一つになり、人形劇の祭典が生まれました。飯田市民・人形劇人・そして行政がそれぞれに力を発揮し、お互いに尊重し合い、3者が三位一体となり、人形劇の祭典



飯田市全景



飯田が誇る伝統文化財のひとつ 獅子舞



第1回の「人形劇カーニバル飯田」1979年



江戸時代から飯田市上郷に継承される黒田人形舞台（国指定重要有形民俗文化財）

「人形劇カーニバル飯田」が生まれ出されたのです。地域の人々が地道に繋いできた伝統の人形芝居を因として、人形劇人たちのお力を縁として起こった尊いお祭りであると思っています。真夏の数日間、全国から、あるいは世界から2千人近くの人形劇人と数万人の観劇者が集まります。小さな赤ちゃんからお年寄りまで、参加証のワッペンを胸につけ、それぞれに自分の見たい人形劇を見るのです。そして、それを支えるのは、中学生から大人までの一般市民のボランティアたちです。普段静かなまちも、この時ばかりは、まちじゅうがひと際にぎわいます。広場では、お店が並び、ここで簡単な飲み物や、食べ物、ちょっとしたゲームをすることもまた楽しみの一つようです。

「人形劇カーニバル」は20年を経過したとき、もっと広く、もっと深く、もっと自由にとの願いから名称を「いいだ人形劇フェスタ」とあらため、市民を中心に運営されるようになり、これも今年21年目を迎えるころまでやってきました。いつの間にか、市民も、劇人も、行政の方々も、また、飯田を知っている多くの方々はいつの頃からか、飯田のまちを「人形劇のまち飯田」と言うようになってきています。



人形たちがまちなかを練り歩くいいだ人形劇フェスタ「わいわいパレード」

「いいだ人形劇センター」設立の意味

そして、人形劇のお祭りが始まって30年が経過したころだったでしょうか。市民の中から、「飯田は人形劇のまちって言うけれど、夏のフェスタの時ばかりのにぎわいで、一年中人形劇が楽しめるわけではないのでは」とか「フェスタは1年のうちの数日、あとの360日をどうにかしないと」というような声が上がってきたのです。週末には家族で人形劇を見に行けるまち、市民が自分でも人形劇を演じたい人は誰でもが上演できるまち、どこかに行けば人形劇の情報がいつでも手に入るまち、人形劇の研究が行われているまち等々があってはじめて「人形劇のまち」ではないのか、と言うのです。飯田市は、その声をしっかりと受け止め、NPO法人「いいだ人形劇センター」を立上げ、6年が経過したところです。

いいだ人形劇センターは、飯田市から「川本喜八郎人形美術館」の指定管理を受け、館の運営を行うとともに、人形劇観賞、人形劇創造、人形劇研究、人形劇情報受発信、人形劇活動サポート、人形劇館利活用推進等々の事業を行っています。具体的には、なかなか見ることのできない、世界の人形劇を紹介（今年はおランダから「レヨ」を招聘）、季節に合わせたテーマで国内劇団の公演、



世界の優れた作品を鑑賞するせかいの劇場 レヨ公演（オランダ）
2019年12月

市内アマチュア劇団の支援や上演のサポート、人形劇のための基礎レッスン、制作や相談、講師を招いての先導的な作品制作、相談窓口の開設、人形劇に関する資料の収集、若手の養成、その他。国内外の人形劇に関する情報や文献の収集と挙げれば枚挙にいとまがありません。また、飯田市の市民が人形劇に積極的にかかわってほしい、そのためには、まず市民一人ひとりが、人形劇に関する情報を知ることからであるということから、年4回、人形劇の情報誌「Dogushi」を季刊誌として発行してきております。これらの活動が、目に見えてどんどん「まち」を変革していくというほどには至ってはおりませんが、少しずつ、少しずつ人形劇の持つ力に気づき、こんな「まち」に生まれ、育ち、ここで生活していることに喜びを感じてくれる人々が出



飯田市川本喜八郎人形美術館外観



市民がつくる飯田発の人形劇「人魚姫」 2015年3月初演

てきてくれることを祈っているところです。

高雄市立歴史博物館との交流

飯田と台湾との交流については、冒頭で酒井氏の功績をあげさせていただきましたように、40年近くの長きに亘って互いに交流し合い、発生の理由も、手法も異なる人形劇文化を楽しませていただけてまいりました。また、人形劇の祭典30周年(いいだ人形劇フェスタ10周年記念大会)の折には、雲林(台湾)・春川(韓国)・飯田(日本)の3都市が「東アジア三大人形劇フェスティバル友好提携」を結び、今後互いに人形劇を通じた国際交流を深めていくことを確認いたしました。

そして、2016年、夏の頃だったでしょうか。高



東アジア三大人形劇フェスティバル調印 2008年



高雄市皮影戲館訪問 2016年10月

雄市立歴史博物館から「人形劇のまち飯田」において、台湾の影絵を紹介したい旨のお話を頂戴いたしました。「いいだ人形劇フェスタ実行委員会」では、これまでほとんど毎年のように、10月上旬に行われている「雲林の人形劇フェスティバル」に伺っていたので、この際少し足をのばして高雄市立歴史博物館が運営しているという「皮影戲館」を訪れました。すると、なんとその月の下旬には、高雄市立歴史博物館のスタッフが飯田を訪れてくれたのです。そして、双方で話し合いを重ね、2017年、飯田の人形劇フェスタの期間に併せて飯田市川本喜八郎人形美術館での影絵の展示をしていただくことが決まりました。その折、同行された永興楽皮影劇団の試演会も開催いたしました。また、具体的な話を進めていく中で、影絵の企画展に合わせて友好協定を結びたい旨の提案を頂きました。2017年8月1日、おりしも、「いいだ人形劇フェスタ」開幕の初日、影絵 in 台湾 台湾「高雄市皮影戲館館所蔵品日本交流展」が開幕、高雄市立歴史博物館と飯田市川本喜八郎人形館の友好協定が締結されたのです。翌2018年には、高雄市立皮影戲館において、飯田の人形劇文化に関する企画展「皮影東遊記」を開催し、期間内に飯田市を中心に活動している竹田人形座竹の子会が高雄で公演することに決まりました。



いいだ人形劇フェスタ2017の期間にあわせ、飯田市川本喜八郎人形美術館で開催された「影絵 in 台湾」展 2017年8月1日～9月5日

日本では、糸操り人形の歴史は、およそ 300 年と言われ、その伝統を受け継いでいる座が飯田にもあります。手板（ていた）と呼ばれる人形を動かすためのコントローラーは日本独自のもので、マリオネットとして広く普及しているヨーロッパの様式とは異なるスタイルです。台湾でもあまり見る機会がないということもあってか、とても興味深く見ていただきました。終演後の人形操作体験でも大勢の方々が参加されていました。これを機に今後も友好協定のもと、お互いの交流がますます盛んになることを願っています。



竹田人形座竹の子会が皮影戯館での上演 2018年11月

竹田扇之助記念国際糸操り人形館の流れをくむ「竹田人形座 竹の子会」について

昨年、飯田を代表して、高雄へ伺った「竹田人形座 竹の子会」について、少しご説明します。手板につながれた十数本の糸にあやつられ、まるで、自分たちが人形であることすら忘れてしまっているのではないかと思われるほどに、生きているが如く、本物の人間であるかのように、いや、本物の人間以上に美しく、そして愛らしく、また憎々しく、よこしまに振舞いながら私たちの心の中に入り込んでいきます。竹田人形座を主宰しておられ

た竹田扇之助氏は飯田に隣接する喬木村の出身。糸操り人形の中興の祖と言われた9代目結城孫三郎の目に留まり、そして最後の弟子として励みます。孫三郎の亡き後、高弟である後の竹田三之助に弟子入りし、1955年に竹田人形座ができるのに合わせて扇之助と改名します。竹田喜之助とともに「雪んこ」(1957年)に代表される数々の糸操り人形(マリオネット)の名作を生みだします。東京を拠点とし、テレビや国内外、また国を超えて様々に活動されてきたとお聞きしています。しかし、1979年、突然に交通事故により相方である喜之助を失います。80年代後半にはご自分でも病のため、思うように人形を操ることができず竹田人形座は活動が中止となってしまいます。1990年、扇之助氏は郷里に戻り、竹田練場(竹田人形座の稽古場)を再建し、竹田人形座の多くの人形や国の内外で収集した多くのコレクションとともに、飯田市に寄贈。市は1999年、これを「竹田扇之助記念国際糸操り人形館」としてオープンさせました。この開館を機に、竹田人形座の芸術と技術を学び継承させようとする講座が地元有志達によってはじめられ、その生徒たちが、師の意思を継ぎ、コツコツとその活動を進めてきています。メンバーは、小学生、中学生、高校生、それに大人と約10人ほどが地道に少しずつレパートリーを増やしながらか活動に取り組んでいます。制作から上演まで、どこをとっても楽なことは無い、でもうまくいったときには何ものにも代えがたい喜びがあるのではないのでしょうか。毎月2回ほどは東京から指導者がきてくれているということです。演目は獅子舞からフレンチカンカンまで。国境も無ければ、時代の制約もない、思いのままを人形で表現して行こうと頑張っているところで



竹田人形座「雪ん子」

人形劇のまちスケッチ～飯田今日このごろ

昨年は、人形劇の祭典 40 周年を迎え、様々なイベントが行われましたが、その中でいくつかをご紹介します。

- AVIAMA (人形の友 友好都市国際協会) の総会が飯田で行われ、加盟 6 か国 (スペイン・



AVIAMA 総会記念撮影 2018 年 8 月

チェコ・フランス・ベルギー・ポーランド・日本) 16 都市のうち 6 か国 8 都市が参加されました。人形劇を通して、世界の仲間たちが生き生きと暮らせるように様々な問題が話し合われました。

- 飯田市はフランス、シャルルビルメジエール市と友好都市提携を結んでいますが、その 30 周年を記念して植樹が行われたり、お祝いの会がもたれました。
- この所、いいだ人形劇センター主催で毎月定期公演が行われるようになりました。飯田では、人形劇を見ることも、人形劇を演じることも珍しいことではなくなりました。小学生から老人まで、自ら演じることは特別な事ではないのです。
- 「人形劇のまち」ってどんなまち？人々がどのように暮らすまちなのでしょうか。いっしょに考えたいものですね。



シャルルヴィル・メジエール市との友好都市提携 30 周年を記念して、飯田市龍江地区「天龍峡桜街道」で行われた「シャルルヴィル・メジエール通り」命名式 2018 年 8 月